ずいひつ No.174

2025 年 5 月 25 日発行

愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター
Aichi Gakuin University Dental and Pharmaceutical Library and Information Center

時代小説のおもしろさを知る

今、人生で初めて「時代小説」に分類される小説を読み耽っている。なぜ人生で初めてなのかというと意識的に避けてきたせいだ。なぜか自分の中に「時代小説は読みにくい」という先入観があって、背表紙を前に「時代ものかぁ」と足踏みしていたのだ。けれど今、4-5 月のコンセプトコーナーで展示された図書をきっかけに、その時代ならではの慣習や現代との違いを含めておもしろさを感じている。

きっかけになったのは宮部みゆき著『きたきた捕物帳』シリーズだ。宮部みゆきはもともと好きな作家の一人で著作は大体読んでいるし、『ソロモンの偽証』（楠元所蔵：913.6/Mi/1～3）や『名もなき毒』（楠元所蔵：913.6/286）などの映像化された作品もほぼ観てきた。作品の登場人物は現実と地続きのどこかで存在しているかのようなリアリティがあり、ストーリーテリングの巧みさと文章の構成力の高さに感動してしまうこともしばしばある。そんな下地があったからこそ時代小説も読めるかも？ という期待があった。

インターネット上で公開されている小説のレビューを見ていると、宮部みゆきの時代小説のファンだ、という人が多くいることに気づかされる（それでもこれまでは素通りしてきたわけだが）。短編もいいけど長編もいい、それぞれ独立した作品でありながら登場人物がリンクしているのが楽しい、下町の人情に触れたくて時折無性に読みたくなる、食べ物がとてもおいしそう、などなど。『きたきた捕物帳』も人気のあるシリーズの一つだ。主人公は孤児だった 16 歳の「北一」。お世話になった十手持ちの千吉親分が亡くなったところから物語は始まっており、千吉親分の家を追い出された北一は親分の本業だった文庫売りをし、細々と生計を立てている。北一の肩書は「岡っ引き見習い」で本のタイトルは「捕物帳」となっているけれどまだまだ北一が活躍しているとは言い難い。時代ミステリーであり、北一の成長譚でもあるこのシリーズを足掛かりに、宮部みゆき作家生活 30 周年記念長編『この世の春』（日進・名公所蔵：上中下巻）を読んで、時代小説のおもしろさを悟った。

宮部みゆき/著
『この世の春』
〔上〕〔中〕〔下〕
（新潮文庫刊）

江戸時代を舞台にした小説、とりわけ主人公が肩書を持たない平民である場合には、確固として存在する身分制度が見えない壁として粛々と立ち塞がっていて、「法の下の平等」を謳う現代では考えられないレベルで犯罪の隠蔽が行われ、殺人という重大な事件ですら白日の下に晒されないことがある。下手人が武士である場合は特に妖（あやかし）や神を騙ってまで市井の民に目隠しをしてしまうのだ。その不平等さと不自由さ、科学が未発達であるがゆえに罪の証拠が見過ごされてしまう歯痒さにやきもきするのだが、逆に言うとそのままならなさを内包しながらどう物語が結末を迎えるのか、読み手であるこちら側を納得させてくれるのか、着地点がどこにあるのか全く分からない期待と不安でページをめくる手が止まらなくなる。さらに『この世の春』では、現代なら簡単に病名がついてしまう（そしてあっさりと投薬治療が始まってしまう）であろう精神疾患が物語の軸にあり、その病と対峙する主治医の葛藤や挑戦からも目が離せない。

時代が抱える理不尽さばかりに目がいってしまうが、身内も他人も同じように食事を共にし、よその子に対しても心を砕いて世話を焼く、そんな人情味あふれる市井の様子に浸りつつ、今しばらく時代小説を読んで新たな魅力を探してみようと思う。

（図書館風紀委員・M）